軍事遠征と記念碑建立

——アッシリア王シャルマネセル III 世の場合——

The Monuments Set Up

by Shalmaneser III during His Campaigns

山田重郎^{*}
YAMADA Shigeo

ABSTRACT The setting-up of royal monuments in the course of royal expeditions is a phenomenon familiar in the history of ancient Mesopotamia. Among the royal records of various Mesopotamian rulers, the inscriptions of Shalmaneser III, king of Assyria (859-824 B.C.), are especially informative on this subject. Over fifty references of this kind in his inscriptions represent twenty historical cases of the erection of one or more monuments. In this paper I shall examine these references and discuss some aspects of the phenomenon.

The monument is referred to as the “image (*ṣalmu*)” of the king in all cases but one, where it is described as a “stela (*asumettu*).” The term *ṣalmu* itself can denote three types of object: (1) a three-dimensional royal statue, (2) a free-standing stela bearing a relief of the royal figure, or (3) a relief engraved on a rock face (i.e. a rock relief). Nevertheless, on the basis of archaeological and iconographic evidence, it may be supposed that the monuments, especially those set up in the open, were usually stelae and rock reliefs rather than statues in the round. Some evidence indicates that the text accompanying the royal image was usually a short commemorative inscription, not a long text of the king’s standard annals as found on various objects unearthed in Assyrian capitals.

The monuments were placed at the most distant points in the course of the campaign, and were designed to perpetuate the king’s arrival at the most remote places. The places chosen can be classified into two categories: (1) at conspicuous geographical features with no associated settle-

^{*} 筑波大学地域研究研究科非常勤講師
Lecturer, University of Tsukuba

ments (mountains, sea coast, river source, etc.); (2) in cities, especially in their sacred places (i.e. temples, etc.). Monuments, especially royal images, erected in the second type of place must have represented the Assyrian king as a worshipper in the local sanctuary. He was thus associated by his image with every act of worship performed there, both as the earthly representative of the gods and as a participant in every favour they might grant. Simultaneously, the image must have reminded the local elite of their relationship with the Assyrian overlord when they came to the place in order to take an oath before the gods or for other purposes.

I. 序

遠隔地へ進軍したメソポタミアの王たちは、遠征先で碑を建てて自らの業績を記念した。古くは前3千年期にアッカドのサルゴンが、また前2千年期には、アッシリアのシャムシ・アダドI世や、マリのヤハドゥン・リムがそれぞれ、西方、地中海地方に向けて遠征し記念碑を建てたという記録が残っている。⁽¹⁾前12世紀以降、ティグラト・ピレセルI世（前1115-1076）、アッシュール・ベル・カラ（前1074-1056）、トゥクルティ・ニヌルタII世（前891-884）、アッシュール・ナツィルパルII世（前884-859）といったアッシリア王たちの王室碑文がこうした遠征先での記念碑建立に言及している。⁽²⁾このうち、特に、アッシュール・ナツィルパルII世はティグリス上流域、ユーフラテス中流域、東地中海沿岸のアマヌス山などで行なった7例もの記念碑建立をその年代記に熱心に記録している。

このアッシュール・ナツィルパルII世のつくった伝統は、その後継者であり、新アッシリア帝国期の先駆けとなる拡張主義的遠征を企てたシャルマネセルIII世（前859-824）によって受け継がれた。実際、その王室碑文においてシャルマネセルIII世は他のメソポタミアの王の誰よりも頻繁に遠征中の記念碑建立に言及する。そこで、本稿ではシャルマネセルの王室碑文中の記事を包括的に研究、分析し、この王による記念碑建立の実態とそのイデオロギー的背景について考察したい。

アッシリアの記念碑建立については、近年、J. ベルカー・クレーン (Börker-Klähn)⁽³⁾ が考古学的、文献学的資料を網羅的に集めている。またD. モランディ (Morandi) はベルカー・クレーンの集めた資料を用い、アッシリア本国や遠征

先に立てられた記念碑や彫像を概括的に扱って、その位置、分布、建立のイデオロギー的背景について論じた。⁽⁴⁾しかし、シャルマネセルIII世の碑文資料に関して、これらの研究は、すでに出版から70年以上を経て不完全となったD.D. ラッケンビル (Luckenbill) による資料集 *Ancient Records of Assyria and Babylonia* (2 vols., New York, 1926-27) にほとんど依拠しており、1950年代から飛躍的に拡大したシャルマネセル碑文のコーパス全体を視野に入れていない。⁽⁵⁾遠征中の記念碑建立について特に豊富な情報を提供するこのコーパスは新たな個別研究に価する内容を持っている。

II. シャルマネセルIII世による記念碑建立の事例

シャルマネセルIII世は35年間の治世中、即位年（治世第0年）から治世第33年まで合計35回、毎年の遠征を行ない（第4年には2回の遠征が行なわれた）、前任者から継承した王国の国境を超えてアッシリアの支配領域を拡大した。⁽⁶⁾こうした遠征の内容は、30点を超える様々な王室碑文に記録された。そのうち、各遠征を年代順に記録する14点の年代記タイプのテキストは王の治世を歴史的に研究するうえで特に重要であり、⁽⁷⁾遠征中の記念碑建立についてのほとんどの情報はこれらのテキスト中に見い出される。

はやくもその即位年、シャルマネセルは北方、ウラルトゥの山岳地域へ遠征を行ない、その帰路にナイリの海（ウルミア湖）に立ち寄って、一つ目の記念碑を建てた。これを翌年、治世第一年に編集された年代記は次のように記している (RIMA 3, A.0.102.3 [microfilm], ll. 37-40)。

*ana tâmti ša kurNairi attarad kakkēya ina tâmti ullil niqēti ana ilāniya aqqi
ina ūmešūma šalam bunnannīya ēpuš tanatti Aššur bēli rabē bēliya u liti
kiššūtiya ina qerebšu alṭur ina muhhi tâmti ušeziz*

私はナイリの海に下り、海で私の剣を洗い、神々に犠牲を捧げた。そのとき、私は、私の似姿の像をつくり、偉大な主、私の主、アッシュール神の賛美と私の力の勝利をそこに書き記し、海のそばに建てた。

その後の遠征でも繰り返されたこうした記念碑建立についての記事は、シャルマネセルの様々な碑文中にのべ50例以上認められる。しかし、こうした記事

表1：遠征先に立てられたシャルマネセルⅢ世の記念碑
(地図1をあわせて参照)

事例	建立地	建立年	方面	場所	碑文言及	記念碑の形状	資料 (RIMA 3. A. 0. -)
1	Nairiの海	0	北	非居住地	有	Stela	102. 1, ll. 33-37; 102. 2, i. 26f. ; 102. 3, obv. 37-40; 102. 28, ll. 11-13; 102. 63 102. 1, ll. 63 f. ; 102. 2, i. 49-51; 102. 3, r. 20-23; 102. 28, l. 22
2	Saluara川	1	西	非居住地	有		
3	地中海岸	1	西	非居住地	有	Stela	102. 1, l. 76'; 102. 2, ii. 7f. ; 102. 3, r. 34-37 (= 102. 86-89); 102. 5, ii. 4f. ; 102. 28, ll. 19f. ; 102. 83
4	Atalur (Lallar) 山	1	西	非居住地	無		102. 2, ii. 9f. ; 102. 3, r. 39f. (= ll. 91f.) ; 102. 5, ii. 3; 102. 6, i. 45; 102. 10, i. 29f. ; 102. 14/15, l. 31; 102. 16, l. 11; 102. 28, ll. 23f. ; 102. 34, ll. 9f. ; 102. 29, ll. 24-26 102. 3, r. 42-44 (= ll. 94-96)
5	Urime市	1	西	居住地	有	Stela (<i>asumattu</i>)	102. 2, ii. 44
6	Saluria市	3	北	居住地	有		102. 2, ii. 54-56
7	Ertia山	3	北	非居住地	有	Stela	102. 2, ii. 58-60
8	Nairiの海	3	北	非居住地	有		102. 2, ii. 60-63
9	Gilzanuの町	3	北	居住地	有		
10	Gilzanu水源	7	北	非居住地	有	Rock Relief	102. 14, ll. 69-72; 102. 16, ll. 40-44; 102. 21, l. 17; 102. 22, l. 13; 102. 78
11	Tigris水源	15	北	非居住地	有	Rock Relief	102. 6, iii. 34-38; 102. 8, ll. 48f. ; 102. 10, iii 27-29; 102. 14, ll. 92f.
12	Dayeniの町/ Euphrates源流	15	北	居住地	無		102. 6, iii. 41-45; 102. 8, ll. 50' f. ; 102. 14, ll. 92f. ; 102. 29, ll. 32-34
13	Euphrates河岸	15	北	非居住地	無		102. 6, iii. 54-57
14	Baal-rasi山	18	西	非居住地	無		102. 8, ll. 22'-24'; 102. 10, iv. 7-10; 102. 12, ll. 28f. ; 102. 16, ll. 132'-134'
15	Lebanon山	18	西	非居住地	無		102. 10, iv. 12-15
16	Queの二つの町	20	西	居住地	有		102. 10, iv. 25-33; 102. 11, r. 6'-14'; 102. 16, ll. 145'-150'
17	Laruba市	21/22	西	居住地	無		102. 16, ll. 160' f.
18	Tunni/Muli山	23	西	非居住地	無		102. 16, ll. 172'-181'; 102. 40, iii. 2-4
19	Harhara市	25	東	居住地	無		102. 14, ll. 124f.
20	Kinalua市	30	西	居住地	無		102. 14, l. 156; 102. 16, ll. 285f.
x	Kenk	4	西	非居住地	有	Rock Relief	
y	Kurkh	6	北	居住地	有	Stela	

のいくつかは同一の事件を——あるときはほとんど同じ言葉使いで、またあるときは異なる言い回しで——記録していると見られ、実際に報告されている記念碑建立は表1に示したように20の事例に絞り込まれる（そのうちの二つ〔事例16と18〕は複数の記念碑建立を扱う⁽⁹⁾）。

この20の内、事例5（Urime市）を除くすべてのケースにおいて、記念碑は王の「像（šalmu）」として言及される。例外である事例5では記念碑は石柱を意味する *asumettu* という語で呼ばれている。これらの用語が具体的にどんな形状の記念碑を意味するのかについては、のちに論ずる。

こうした文献資料の他に、4つのシャルマネセル像が、実際にアッシリアの遠隔地から発見されている。一つはティグリス川上流域のクルク（Kurkh）で発見された平たい石柱（いわゆる Kurkh Monolith）で、シャルマネセルの立像のレリーフと王の碑文が彫られている⁽¹⁰⁾（図1）。もう一つはユーフラテス川沿い、ケンク（Kenk）溪谷の岸壁にシャルマネセルの碑文と一緒に彫り付けられた王の立像のレリーフである⁽¹¹⁾。残りの二つはティグリス川水源地域の岩肌に刻まれた一対の王の立像のレリーフで、それぞれ王の業績を記した碑文がその脇に刻まれている⁽¹²⁾。これらティグリス川水源地域の一対の記念碑は、おそらくシャルマネセルの年代記が治世第15年にその建立を記録している王の像（事例11）と同定される（以下参照）。一方、クルクとケンクの王の立像の建立はシャルマネセルの年代記に言及されていない。年代記編集者は、なぜこれらを記録しなかったのだろうか。

クルクの石碑には、王の治世第6年までの業績が刻まれており、第6年のシリア遠征の後、間もなく作製されたに違いないが、石碑建立の詳しい経緯は不明である。注目すべきは、クルク地域が——アッシリアの中心地域から離れてはいるものの——アシュール・ナツィルパルII世の時代にすでに征服され、アッシリア人の入植が行なわれて、アッシリアの行政管理下に組み込まれていた⁽¹³⁾という点である。それゆえ、原則としてアッシリアの直接の行政管理領域の外にある標的に対する軍事行動だけを記録する年代記がクルクでの記念碑建立に言及しないのは理解できる⁽¹⁴⁾。

ケンク磨崖碑の方は、その碑文が治世第4年にユーフラテス川西岸のアラム国家ビート・アディニ最後の砦シッタムラトの攻略を記念しており、この戦いの帰途にアッシリア軍がユーフラテスを渡った際に彫られたものと推察され⁽¹⁵⁾

(16)
る。おそらく、年代記は通常、遠征の帰途について関心を払わないため、この記念碑の建立はどこにも記録されなかったのであろう。いずれにしても、この例は遠征中に建てられた全ての記念碑が漏れなく年代記に記されたわけではないことを示している。また、年代記の異なるバージョンを比較すると、あるバージョンには記録されている記念碑建立が、しばしば別のバージョンでは無視されていることが分かる。当然予想されることではあるが、年代記と言えども常に全てを記すわけではないことが、このことによっても確認できる。

III. 記念碑建立報告の用語法と記念碑の形状

記念碑建立の報告には次の3つの基本的要素が見い出される。(1)記念碑(主として王の像)の作製(動詞は *epēšu*, *banû* 「作る, 建てる」), (2)記念碑への刻文(動詞は *šatāru* 「書く, 刻み付ける」; 碑文の内容については後述), (3)記念碑の建立 (*izuzzu* [*Š*-stem], *zaqāpu* 「立てる」)。先に引用した即位年のナイリの海での記念碑建立報告においても、この三つの要素が認められる。しかし、全ての報告例で、三つの要素が揃っているわけではなく、しばしば不完全な組み合わせ(要素1と2のみ, 1と3のみ, 2と3のみ, 3のみ)も見られる。

すでに述べたように、記念碑は一つの例外を除いて *šalmu* 「像」という語で呼ばれている。唯一の例外、事例5の *asumettu* は碑文あるいはい何らかのレリーフが刻まれた石柱を意味する語である。⁽¹⁷⁾ 興味深いことに、碑文が刻まれた記念碑一般を意味する語としてよく知られている *narû* は、シャルマネセルが遠征中に立てた記念碑を示す語として一度も用いられていない。⁽¹⁸⁾ そこでシャルマネセルのテキストは、遠征先に立てられた数多くの記念碑はおしなべて王の像であったと殊更に強調しているように見える。語 *šalmu* は単独で現われることもあるが、最も頻繁には修飾語をとまって *šalam šarrūtiya* 「私の王としての像」として言及される。また *šalam bēlūtiya* 「私の主としての像」, *šalam bunnannīya* 「私の似姿の像」, *šalam gešrūtiya* 「私の英雄としての像」という類似表現も散見される。

これらの表現だけから記念碑の形状を正確に特定することは不可能である。王の「像」という表現は考古学的発見から知られている次の三つのタイプの記念碑のどれをも意味し得るからである。すなわち、第一に立体的に作られた王

の立像 (statue in the round), 次はクルク石碑のような上部を丸く整形された石板 (stela) の上に刻まれた王の像のレリーフ, 第三に, ケンクで発見されたような岩壁に直接刻まれた王の像のレリーフ (rock relief) ⁽¹⁹⁾ である。

それでも, シアルマネセルの年代記にその建立が記録されている王の像のうち, いくつかは, 考古学的, 図像学的資料の助けをかりて, その形状を特定することができる。年代記に言及される王の像が実際に発見されたレリーフと同定できるケースは, 前述のティグリス川水源地域の岸壁に刻まれた一対の王のレリーフ (rock relief) の場合である。王の年代記は, 治世第 7 年と第 15 年にシアルマネセルがティグリスの水源に達して王の像を「立てた」と記録しているが (表 1, 事例 10, 11), レリーフに添えられた碑文の内容からみて, 発見された一対のレリーフは第 15 年に作製されたものと推定される。このレリーフでは, 王は右肘を曲げその人さし指を前方に伸ばして神々と対話する「指をのばす」⁽²¹⁾ (*ubāna tarāṣu*) と呼ばれるポーズをとっている。これは, クルク石碑やケンク磨崖碑のレリーフに描かれた王のポーズと同一である。⁽²²⁾

図像学的情報を提供するの, アッシリア本国, バラワト (Balawat) から出土した門の扉を飾る一連の青銅製バンドの絵巻物風浮き彫りである。ここにはシアルマネセル III 世の記念碑建立を描いた場面が 3 例認められる。バンド I の場面 (図 2) は, そこに彫られた説明文が示すように「ナイリの海」⁽²³⁾ での王の像の建立を扱っている。そこでは, 王の像を刻んだ石柱 (stela) が湖岸に立っており, 王と高官たちが祭儀を行なっているところが描かれている。石碑は上部が丸く整形されており, 枠の中に「指をのばす」ポーズの王の像が見える。このシーンは即位年 (事例 1) か治世第 3 年 (事例 8) の記念碑建立と同定することができる。第 2 の場面はバンド X に認められる (図 3)。⁽²⁴⁾ これは, 説明文が示すようにティグリスの水源の場面で, アッシリアの彫刻家が, 前述の石碑と同じように上部を丸く整形された枠組みの中に同じポーズの王の立像を岩肌⁽²⁵⁾ に直接刻み付けているシーンである。この場合, 記念碑は石板 (stela) ではなく磨崖碑 (rock relief) である。この事件は, 通常, 王の治世第 7 年 (事例 10) に帰せられる。第 3 の場面はバンド N で, 再び同じポーズの王の立像を刻んだ上部の丸い石板 (stela) が小高い場所に立っている場面である (図 4)。⁽²⁶⁾ このバンド N は断片的にしか残っておらず, 説明文もないため描かれた記念碑建立の歴史的背景は不明である。しかし, 描かれている場所を地中海の海岸とする E.

⁽²⁷⁾
Unger の提案を受け入れるなら、事件は治世第 1 年の事例 3 に同定される。

バラワト門の青銅バンドに描かれたシャルマネセルの像と、実際にアッシリアの遠隔地（ティグリス水源とケンク峡谷）で発見された王の像は、いずれも同形式の王レリーフであり、石板か岩壁に彫られている。このことはシャルマネセルが遠征中に立てた王の像——特に屋外に立てたもの——は通常、石板状記念碑（stela）か磨崖碑（rock relief）であって、立体的な王の彫像（statue）ではなかったことを示唆している。しかし、シャルマネセルによって占領された町——とりわけその聖所（以下を見よ）——に立てられた王の像は、アッシリアの中心都市で実際に発見されているような立体的彫像であった可能性も否定⁽²⁸⁾できない。

IV. 記念碑上の碑文

全部で20の事例のうち、年代記が王の記念碑に刻まれた碑文に言及するのは11事例（事例 1-3, 5-11, 16）である。しかし、碑文について特に言及のないケースでも、おそらく、記念碑の設立者を明示するために、王の名とタイトルを含む何らかの碑文が刻まれたに違いない。この11の事例のうち事例 5 を除く10の事例において、碑文の内容は「アッシュール神の賛美（*tanitti/tanatti Aššur bēli rabī bēliya*）」、「私（王）の英雄的行為と勝利（*ilkaḫāt/alkaḫāt qurdiya; epšēt tanittiya/tašnintiya; lit/ tanatti kiššūtiya*）」といった一般的表現で示されている。

しかし、いくつかのケースにおいて、碑文の内容について、さらに具体的な情報が発見される。ハッティ（すなわちシリア）の国々との戦いの後、シャルマネセルが地中海に達して立てた記念碑（事例 3）に関して、年代記は「偉大なる主、わたしの主であるアッシュール神の賛美と私がハッティの地（var.: 海岸の地）でおさめた勝利を書き記した」と記す。また王の軍が西からナイリ⁽²⁹⁾の海（ウルミア湖）に達した後、さらにその南に位置したギルザヌ（Gilzanu）に到達して立てた碑文（事例 9）の内容は「偉大なる主、わたしの主であるアッシュール神の賛美と私がナイリ⁽³⁰⁾の地でおさめた私の力の勝利」と言われる。これは、これらの碑文が記念碑建立に先だって成し遂げられた軍事的業績に焦点を当てて書かれたことを示唆する。すなわち、これらのテキストはアッシリア本国から多数発見されるような王の毎年の遠征を年代順に全て記録する標準的年代記

ではなかったと考えられる。前述のケンク溪谷で発見された王のレリーフと一緒に刻まれた碑文は、実際、直前に戦われたと見られるアラム国家ビート・アディニとの戦いに焦点をあてて書かれており、この推定を支持する。⁽³¹⁾

シャルマネセルの年代記が記念碑の碑文の具体的内容に触れているもう一つの例は、第7年にティグリス川水源に彫られた記念碑の場合（事例10）である。この記念碑の碑文の内容は、年代記によれば「私が国々で行なった全てのこと（*mimma ša ina mātāte ēteppuša* [sic., var.: *ētaḫpa*[...]]」⁽³²⁾）と言われる。これは、実際にティグリス水源で発見されシャルマネセルの第7年に彫られたとみられる一対の碑文——ただし王の像の存在は確認されていない——の内容とよく符合する。⁽³³⁾この碑文は様々な国で成し遂げられた王の業績を選択的にひろって手短かにまとめたものだからである。これまでに見たことから、シャルマネセルが遠征中に立てた王の像に付けられた碑文は、特定の事件を扱ったものか、王の様々な業績を手短かにまとめたもので、毎年の遠征を全て記録する標準的な年代記ではなかったと結論してよさそうである。

V. 記念碑の設置場所とそのイデオロギー的背景

シャルマネセルの遠征記録で言及される王の記念碑は、通常、遠征中にアッシリア軍が到達した最も遠い地点に立てられている。方角としてはアッシリアを中心として西と北が最も多い（西に10事例、北に9事例、東に1事例、南に0事例〔表1「方面」及び地図1参照〕）。この分布は各方面への遠征の頻度（西に21回、北に10回、東に3回、南に2回）を反映している。治世第8年と第9年、シャルマネセルはバビロニア王の要請を受けてバビロニア王国の内乱を鎮圧するため南方へ出征しているにもかかわらず、この方面では一つの記念碑建立も報告していない。これはおそらく偶然ではなく、シャルマネセルが同盟国であり先進文明国でもあるバビロニアを対等な国として認め、その領土内にアッシリアの主権を主張するような記念碑を立てるのをあえて避けたということだろう。

別の観点から、記念碑の立てられた位置は、二つのカテゴリーに分類される（表1「場所」を参照）：（1）人の居住していない地形的に際立った場所；（2）占領した町の中。第1のカテゴリーの記念碑（すべて「王の像（*šalmu*）」）は、おそらく「世界の境界」を象徴する山、海、湖、川の水源地などに王が到達した

ことを記念し、将来そこを訪れるであろう後代の君主にその業績を知らしめるべく立てられたと考えられる。⁽³⁴⁾ シャルマネセルが到達した地中海、ウルミア湖、アマヌス山、レバノン山、アナトリアの山々等は、実際それまでにアッシリアの王たちが到達し得た最も遠い地であり、アッシリアの支配者にとって、ある意味で「世界の果て」であった。⁽³⁵⁾ サルアラ川水源（事例2）やアタルル山（事例4）のようなさほど有名でない山や流れでさえも遠い異国の特筆すべき場所と見られたであろうことは想像に難くない。

占領された町々に立てられた記念碑については、8つの事例（事例5 [asumettu]、事例6、9、12、16、17、19、20 [すべて salmu]）のうち4つのケースについて、町の中の特定の場所が言及されている：⁽³⁶⁾

事例6：「サルリアの下の町の ēqu の場 (ina qaqqari ēqi)」⁽³⁷⁾

事例9：「彼（ギルザヌの王アサウ）の町の神殿 (ina ekurrišu)」

事例17：「彼（バル）の要塞都市ラルバの神殿 (ina ekurrišu)」

事例20：「パティンの王都キナルアの神殿 (ina bit ilānišu)」

以上4つのケースはいずれも町の中の祭儀の場（神殿か ēqu の場）を示している。これと比較できる例が他のアッシリア王の記録にも見い出される。アッシュール・ナツィルパルII世は占領した ハブフ (Habhu) の地の一都市で ēqu の山に (ina šadē ēqi) 自分の像 (šalmu) を立てたと言う。⁽³⁸⁾ 同王はまたユーフラテス中流域のヒングヌの町の宮殿に自分の像 (šalmu) を立て、門に刻文の入った記念碑 (narē [複数]) を置いたと報告する。⁽³⁹⁾ 前8世紀後半にガザを占領したティグラト・ピレセルIII世は町にある宮殿に自らの黄金の像 (šalmu) を立て、「これを 彼等（ガザの人々）の国の神々と一緒にした (ana ilāni mātišunu amnūma)」と記している。⁽⁴⁰⁾ こうした例は、アッシリアの王の像は——それが石板に刻まれたレリーフであったにせよ、立体的な立像であったにせよ——占領された町の聖所にその土地の神々の像やその他のシンボルと共に置かれ、アッシリア本国の神殿でそうであったように、礼拝者としてのアッシリア王を象徴したに違いない。⁽⁴¹⁾ こうして、アッシリア王はその像を通して、地上における神々の代理人として、また神々が与えるあらゆる恩恵を分かち合う者として、聖所で行なわれる全ての礼拝行為に参与するものと見なされたのであろう。⁽⁴²⁾

最後に、聖所に置かれた王の像の持つ法的、政治的意味について考えてみたい。古代中近東世界において、誓いは神々のシンボルの前で誓われたことが広

く知られている。⁽⁴³⁾しかし、王の像もまたしばしば誓いの儀式と関係した。前7世紀のアッシリアの属州グザナでは、ナブー神、シャマシュ神（の像）と並んで王の像（*šalam šarri*）を証人として契約が取り交わされたことが知られている。⁽⁴⁴⁾同様に、エサルハドンの王位継承条約は、アッシュール神や他の大神たちと並んで王であるエサルハドンとその王位継承者であるアッシュール・パニバルの像（*šalmu*）の前で誓われている。⁽⁴⁵⁾もし同様の習慣がシャルマネセルIII世によって占領された町々でも行なわれたと仮定するなら、アッシリア王の像は神々の像と並んで契約や誓約の証人としての役割を果たし、それによって、その土地の支配者層に彼等の生きる世界がアッシリアの支配下にあることを印象付け、おそらくは神々と宗主であるアッシリア王の前で誓ったであろう宗主・属王条約を思い起こさせたことだろう。⁽⁴⁶⁾

結 び

本論文の論点は、後のアッシリア王たちによる同様の記念碑建立を考える上でも参考になるはずである。しかし、シャルマネセルの場合ほどまとまった資料は得られないとはいえ、後代の王の事業についても、ここで行なったのと同様の個別研究が必要である。そして、そうした個別研究を基礎に、歴史的状況の変化と王室碑文のスタイルの異同に留意しながら、アッシリアの遠隔地における記念碑建立についてのすべての情報を歴史的・包括的に分析することが今後の課題として残っている。

付 記

本稿は、1998年8月27日、第38回シュメール研究会（於早稲田大学）において行なった研究発表に基づいて作製された。原稿中で使用した文献の略号は特に断わりのない場合、*The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, vol. 17, Š/III, Chicago, 1992, pp.v-xxii に依る。例外は RIMA/RIME=The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Assyrian Periods/Early Periods (Toronto, 1987-)。

注

- (1) A.K.Grayson, *Chronicles*, p. 153, l. 5 (サルゴン); G.Dossin, “L’inscription de fondation de Iahdun-Lim, roi de Mari,” *Syria* 32 (1955), p.13f., ii 14-20=RIME 4, E.4.6.8.2, ll.52-58 (ヤハドゥン・リム; この一節中の *hamūšam hamāšu* 「記念碑を立てる」という表現については J.-M.Durand, *NABU* 1987, No.3, p.45

- を見よ); RIMA 1, A. 0. 39. 1, ll.81-87 (シャムシ・アダド). Cf. A. Malamat, "Campaigns to the Mediterranean by Iahdunlim and Other Early Mesopotamian Rulers" in *Studies Landsberger*, pp.365-373.
- (2) RIMA 2, A.0.87.1, vi 15-21; A.0.87.15; A.0.101.1, i 104f. (以上ティグラト・ピレセル I 世); RIMA 2, A.0.89.2, iii 13'f., A.0.89.3, ll. 1'-5' (以上アッシュール・ベール・カラ); RIMA 2, A.0.101.1, i 104f. (トゥクルティ・ニヌルタ II 世); RIMA 2, A.0.101.1, i 68f., 98f., 104f., ii 5-7, ii 91, iii 25f., 89f.; A.0.101.19, ll.51f. (以上アッシュール・ナツィルパル II 世); Cf. J. Börker-Klähn, *Alt Vorderasiatische Bildstelen und vergleichbare Felsreliefs* (Baghdader Forschungen 4), Mainz am Rhein, 1982 (以下 *Bildstelen* と略す), pp.177-184.
- (3) *Bildstelen*, pp.177-227.
- (4) "Stele e statue reali assire: localizzazione, diffusione e implicazioni ideologiche," *Mesopotamia* 23 (1988), pp.105-155.
- (5) 現在知られているシャルマネセル III 世の碑文すべての公刊は, A.K.Grayson の RIMA 3 の出版 (1996年) によって一通り完結した。
- (6) シャルマネセルの遠征の年代に関する問題は J. E. リードによって解明された: J.E.Reade, "Assyrian Campaigns, 840-811 B.C., and the Babylonian Frontier," *ZA* 68 (1978), pp.251-260. シャルマネセルの遠征一般については, A.K.Grayson, "Assyria: Ashur-dan II to Ashur-nirari V (934-745 B.C.)," in *The Cambridge Ancient History*, 2nd edition, III/1, Cambridge, 1982, pp.238-281, esp. pp.259-269 も参照。
- (7) ここで年代記タイプに分類したテキストは RIMA 3, A.0.102.1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16. シャルマネセルのテキストの分類については Schramm, *Einleitung*, pp.70-105 を比較参照。
- (8) 「ナイリの海」がヴァン湖を意味するのかわルミア湖を意味するのは長く議論されてきたが, この文脈ではほとんど確実に後者を指している。これについては M. Salvini, "Forschungen in Azerbaidjan. Ein Beitrag zur Geschichte Urartus," in H.Hirsch and H.Hunger (eds.), *Vorträge gehalten auf der 28. Rencontre Assyriologique Internationale in Wien, 6.-10. Juli 1981* (AfO Beiheft 19), p.387; J.E. Reade, "Iran in the Neo-Assyrian Period," in M.Liverani (ed.), *Neo-Assyrian Geography*, Rome, 1995, p.39 を見よ。
- (9) 事例を表 1 に示したように絞り込み, それぞれの記念碑の位置を地図 1 のように地図上に示すにあたって, 問題がないわけではない。例えば, ナイリの海のケースについて注 8 をみよ。その他の数多くの場合については紙幅制限のため議論を割愛した。
- (10) Nahr el-Kalb や Uzunuglantepe で発見されたアッシリア王の像のレリーフがシャルマネセル III 世のものである可能性が論じられてきたが, こうした同定が不確かなものはここに含めない。これらのレリーフについてはそれぞれ H. Winckler, *Das*

- Vorgebirge am Nahr-el Kelb und seine Denkmäler*, Leipzig, 1909, p.16; O.A. Taşyürek, "Some New Assyrian Rock-Reliefs in Turkey," *AnSt* 25 (1975), pp. 169-172 を見よ。
- (11) J.B.Pritchard(ed.), *The Ancient Near East in Pictures Relating to the Old Testament*, 2nd ed. with supplement, Princeton, 1969, no.443 (写真)；テキストは RIMA 3, A.0.102.2.
- (12) O.A.Taşyürek, "A Rock Relief of Shalmaneser III on the Euphrates," *Iraq* 41 (1979), pp.47-53.
- (13) C.Lehmann-Haupt, *Materialien zur älteren Geschichte Armeniens und Mesopotamiens*, Berlin, 1907 (以下 *Materialien* と略す), pp.31-35 (no.20) and 38 (no.22). テキストの新しい音訳と翻訳は RIMA 3, A.0.102.23 and 24.
- (14) この地域に対するアッシュール・ナツィルパル II 世の 3 度にわたる遠征については以下のテキスト(いわゆる年代記[Annals]と Kurkh Monolith)に記録されている：RIMA 2, A.0.101.1, i 99-ii 23, ii 86-135, iii 92-113; A.0.101.19, ll.27-103. また、この地域におけるアッシリアの行政組織の確立は、トゥシュハン市の行政長官として知られているイシュタル・エムカヤ (Andrae, *Stelenreihen*, no.99) が前867年のエボニムになっている (A.R.Millard, *The Eponyms of the Assyrian Empire 910-612 BC* [SAA Studies 2], Helsinki, 1994, pp.26, 56 and 97) ことによって証明される。これはすでに E. フォーラーによって指摘された (Forrer, *Die Provinzeinteilung des assyrischen Reiches*, Leipzig, 1920, p.33)。
- (15) Cf. N.Na'aman, "Two Notes on the Monolith Inscription of Shalmaneser III from Kurkh," *Tel Aviv* 3 (1976), p.90.
- (16) O.A.Taşyürek, "A Rock Relief of Shalmaneser III on the Euphrates," *Iraq* 41, p.52.
- (17) CAD A/II, p.348.
- (18) ただし、アッシリア本国の建築物に埋め込まれた記念埋蔵物 (foundation deposit) は *narû* と呼ばれている (RIMA 3, A.0.102.10, Lower edge, l.2)。*narû* の用例一般については CAD N/I, pp.364-367 を見よ。
- (19) この問題について論じた先行研究として、E.D.van Buren, "The *Šalmê* in Mesopotamian Art and Religion," *Or.*10 (1941), pp.65-92, esp. 70-75; D.Morandi, *Mesopotamia* 23, pp.105-155, esp.105f.; cf. CAD, Ş, pp.78-85. アッシリアの中心地域から発見された新アッシリア時代の立体的な彫像を集めた文献として、E. Strommenger, *Die neuassyrische Rundskulptur*, Berlin, 1970 も参照。石板状の碑 (stela) と磨崖碑 (rock relief) については Börker-Klähn, *Bildstelen*, pp.54-60, 177-224 を見よ。動詞「立てる (*izuzzu* [Š-stem], *zaqāpu*)」は磨崖碑を岩肌に彫り付ける行為よりもむしろ単立する彫像や碑を据える行為を示すと考えたくなるが、この動詞は広い意味で前者もまた表現し得る。たとえば、ティグリス源流の岩肌に直接彫

- られた王の像のレリーフについて、シャルマネセルのテキスト (RIMA 3, A.0.102.10, iii 28; A.0.102.14, II.93) は「立てた (*ušezziz, ulziz*)」と表現していることに注意。
- (20) 碑文は Lehmann-Haupt, *Materialien*, pp.31-35 (no.20 [Tigr.II] =RIMA 3, A.0.102.23), 38-41 (no.22 [Tigr.IV] =A.0.102.24)。これらの碑文は、シャルマネセルの治世第14年に起こったシリアでの連合軍との第4回目の戦いに言及しており、治世第15年に刻まれたと考えられる (E.Unger, “Die Wiederherstellung des Bronzektors von Balawat,” *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Athenische Abteilung* 45 [1920], pp.31ff. and 53; cf. Schramm, *Einleitung*, pp.84f.)。
- (21) このジェスチャーについては U.Magen, *Assyrische Königsdarstellungen-Aspekte der Herrschaft* (Baghdader Forschungen 9), Mainz am Rhein, 1986, pp.45-55, 94-103 を見よ。
- (22) クルク石碑では、王の像の左上に6つ神々のシンボルマークが認められる。図1を見よ。
- (23) 写真は L.W.King, *The Bronze Reliefs from the Gates of Shalmaneser III, King of Assyria 860-825 B.C.*, London, 1915 (以下 *Bronze Reliefs* と略す), pl.I. 説明文は RIMA 3, A.0.102.63。
- (24) 写真は King, *Bronze Reliefs*, pl.LIX. 説明文は RIMA 3, A.0.102.78。
- (25) A.Billerbeck and F.Delitzsch, *Die Palasttüre Salmanassars II aus Balawat: Erklärung ihrer Bilder und Inschriften* (BA 6/1), Leipzig, 1909, p.55 (Schiene J)。
- (26) 写真は Unger, “Die Wiederherstellung(注20),” pl.I。
- (27) *Ibid.*, pp.67f。
- (28) シャルマネセルの立体的彫像はカラハから2体 (J.V.Kinnier Wilson, *Iraq* 24 [1962], pp.90-115 and pls.30, 33-35; J.Læssøe, *Iraq* 21 [1959], pp.147-157), アッシュールから1体 (Andrae, *Festungswerke*, Text volume, pp.37f.) 発見されている。
- (29) RIMA 3, A.0.102.3, r.34-37; A.0.102.28, II.19-20。
- (30) RIMA 3, A.0.102.2, ii 60-63。
- (31) Taşyürek, *Iraq* 41 (1979), pp.47-53=RIMA 3, A.0.102.20。
- (32) RIMA 3, A.0.102.14 (Black Obelisk), II.67-72; A.0.102.16 (Calah Statue), II.40-44。
- (33) 碑文は RIMA 3, A.0.102.21-22 (=Lehmann-Haupt, *Materialien*, pp.36-38 [no.21=Tigr.III], 42f. [no.23=Tigr.V])。この碑文の発見を記録するレーマン・ハウプトのレポートはティグリス水源にシャルマネセルの治世第15年に刻まれた碑文 (Tigr.II, Tigr.IV) には王の像が付いていた (上述) ことを記しているが、治世第7年の一対の碑文については、王の像のレリーフを伴っていたとは記していない (*Materialien*, pp.31-43; 王の像は Tigr.III と Tigr.IV に付けられているとするべ

ルカー・クレーンの記述 [*Bildstelen*, p.188] は誤り)。これは、王の年代記が第15年のみならず第7年にも王の像の設置を記録することと矛盾する。王の像は著しく磨減してレーマン・ハウプトに認識されなかったか正しく報告されなかったのではあるまいか。

- (34) 記念碑建立における世界的境界への到達の記念というイデオロギー的側面は、近年 D. モランディ (*Mesopotamia* 23, pp.120-124) と M. リベラーニ (*Liverani, Prestige and Interest: International Relations in the Near East ca. 1600-1100 B.C.*, Padova, 1990, pp.59-65) によって論じられた。また、H. Tadmor はこうした記念碑が将来訪れる君主に発見されるべく期待して立てられたと論じている (in S. Parpola and R. M. Whiting [eds.], *Assyria 1995: Proceedings of the 10th Anniversary Symposium of the Neo-Assyrian Text Corpus Project, Helsinki, September 7-11, 1995*, Helsinki, 1997, pp.330f.).
- (35) ただし、すでにティグラト・ピレセル I 世がレバノン山と地中海に、アッシュール・ナツィルパル II 世がレバノン山、アマヌス山と地中海に達している (RIMA 2, A.0.87.3, ll.16-25; A.0.101.1, iii 84-92)。
- (36) 事例 5 は石柱 (*asumettu*) で、そこには王の像のレリーフは彫られていなかったかもしれない。
- (37) *ēqu* は何らかの形で祭儀に関係する物体であるが、正確に何かは不明。CAD E, pp.243ff.; *AHw*, p.232 を見よ。
- (38) RIMA 2, A.0.101.1, i 68f.
- (39) RIMA 2, A.0.101.1, i 98f.
- (40) H. Tadmor, *The Inscriptions of Tiglath-pileser III, King of Assyria: Critical Edition with Introductions, Translations and Commentary*, Jerusalem, 1994, pp.222-225 (Excursus 4) .
- (41) アッシリア本国においてアッシリア王と皇太子の像を神殿に設置した例として以下がある：ニヌルタ神像の前に置かれたアッシュール・ナツィルパル II 世像 (RIMA 2, A.101.30, ll.76-78)；アッシュール神殿のエサルハドンとアッシュール・パニバル像 (Borger, *Esarh.*, p.87, r.3f.)；ハラんでシン神像の周りに置かれたエサルハドンと彼の子女達の像 (*ABL* 36=SAA 10, no.13, r.2-8)；タシュメトウ女神像の周りに置かれたエサルハドンとアッシュール・パニバルの像 (*ABL* 257=SAA 10, no.358, r.4-6)；ベール神とナブー神の像の前に置かれた王の像 (*ABL* 951, l.20)。U. マゲンによるこうした事例の収集と議論 (*Assyrische Königsdarstellungen*, pp.41f.) も比較参照せよ。
- (42) C. J. Gadd, *The Assyrian Sculptures*, London, 1934, p.16; cf. M. Cogan, *Imperialism and Religion: Assyria, Judah and Israel in the Eighth and Seventh Centuries B.C.E.*, Montana, 1974, p.58. かつて、アッシリア王は外国において自らを神として礼拝することを奨励したという仮説が提出された (例えば, A. T. Olmstead, *The*

- American Political Science Review* 12 [1918], pp.69 and 72)。しかし、この見解は、ガド（前掲書同頁）と特にコーガン（前掲書56—60頁）によって決定的に論駁された。
- (43) 例えば, A. Walther, *Das Altbabylonische Gerichtswesen*, Leipzig, 1917, pp.191-195; R.Harris, “The Journey of the Divine Weapon,” in *Studies Landsberger*, pp. 217-224.
- (44) A. Ungnad (et. al.), *Die Inschriften vom Tell Halaf* (AfO Beiheft 6), Osnabrück, 1967, pp.62f. and table 23, no.112; cf. Cogan, *Imperialism and Religion*, pp.57-60.
- (45) S.Parpola and K.Watanabe, *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths* (SAA 2), Helsinki, 1988, pp.44f. (no.6, ll.397-409).
- (46) シャルマネセルIII世の時代, 属王としての臣従の誓いがアッシリアによって征服された国々に課されたことはほとんど疑う余地がない。こうした属王の誓いあるいは宗主属王条約は、後の時代, 前8—7世紀に交された *adê* と呼ばれる誓約／条約が何点か残っているが (SAA 2, esp. nos.2, 5, 6, 10 and 13), シャルマネセルIII世の時代には、直接的証拠がない。しかし、シャルマネセル以前のアッシリア王の王室碑文中に、屈服させた国々の君主に属王として忠誠の誓いを立てさせたという記述が頻繁に見られる。例えば, RIMA 1, A.0.76.3, ll.9-11; A.0.78.1, iii 2-5; RIMA 2, A.0.87.1, v 14-16; A.0.99.2, ll.49f.; A.0.100.5, ll.24f.

図1 クルク石碑

図4 パラワト青銅バンドN

図2 パラワト青銅バンドI

図3 パラワト青銅バンドX